



# 本年の巧みにお願、申し上げます。

## 断酒 みどりの友

発行所 呉みどり断酒会  
事務局  
呉市押込 5-12-25  
渡部 憲方  
郵便番号 737-0915  
電話 33-5571  
発行人 渡部 憲  
編集代表 石橋 剛  
印刷 松広印刷



してもらったことを  
して返したい  
会長 渡部 憲

新年あけましておめでとうございます。

呉みどり断酒会も、本年二月には結成45周年を迎えさせて頂きま  
す。昨年、全断連が公益社団法人  
の認可を受け、当会々旗も新調し、  
記念大会での出番を待っています。

今後一層の公益性を要求される  
こととなり、遅まきながら当会も  
昨年春より『酒害相談員』制度を  
スタートした。まだまだその成果  
反響は出てこないが、地道に粘り  
強く今年も更なる酒害啓発活動に  
努めて参ります。

世間には、この『断酒会』とい  
う名前も、実態も知らない人が沢  
山いるはず。いや、殆ど知られて  
いないかもしれない。今年の元旦  
の朝も、人気もなく静閑な団地の  
自販機の前で、背を丸め、震える  
手でチューチューとワンカップを  
すくっている者が、きつという筈  
である。私で最後ということは一  
い筈である。

(あ、今年もダメか…)

この朝酒を止めやあ、ほんまに  
わしは死んでしまおうわ。馬鹿じゃ  
なあ、わしは…と、鼻水垂らし、  
涙を流し呑んでいる者が…。この  
人も多分、数時間前には、大晦日  
の除夜の鐘が鳴ったら、(来年こ  
そ、迎え酒は止めよう!!)と決意  
していたと思う。

大じようぶ!! 毎年々々そんな  
元旦を迎えていた私がここに  
いる。一日も、一刻も早く、この『断  
酒会』のことを教えてあげたい。  
そして、そこには、同じ酒地獄の  
中でもがき苦しんできた父親、兄  
貴のような人達ばかりが、皆んな  
笑顔で待っていてくれる。

「渡部さん、よう来たねえ。大  
じようぶだよ。一緒に頑張ろうや。  
みんな一緒じゃけん。」と、手を  
握って下さって幾年月。断酒を条  
件に、懲戒免職を免れた元海上自  
衛官も、この断酒会に救って頂い  
て、僅かながら年金まで戴けるな  
んで、まさに奇跡である。私一人  
の喜びで終わらせてはいけない。

# 呉みどりヶ丘病院

## 創立41周年記念 体験発表



北舛 武康  
(本人)

いつもお世話になっております。呉みどり断酒会の北舛武康です。よろしく、お願い致します。

本日は、呉みどりヶ丘病院創立四十一周年記念特院、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

この記念すべき日に、体験発表の機会を与えて頂き、心から感謝しております。

私の両親は、今でも二人で漁業を営んでいます。遠く長崎県、東シナ海の方まで行くので地元に戻るのには正月とお盆だけです。父親は滅多に会うことの出来ない子供達にひどく甘い親でした。私は三人姉兄の末っ子で中でも一番甘やかされ、甘えていました。ご飯を食べる時でも、確か小学三年くら

いまで父親の懐に入り込み食べてたと思います。そんな中、父親の飲んでいるビールを飲ませて貰ったのが、私の初めてのアルコールです。小学校、中学校と地元の学校に進む中で、特に小学生の時は不良高校生並みの悪童で手に負えなかった。両親はいないので祖母に預けられていたが孫でもあり、きつく叱ることはなかった。周りの大人に叱られても知らん顔だ。学級は、しばしば崩壊していた。火遊びすれば、納屋を全焼さすわ、人の家の舟を勝手に出して隣の島に遊びに行くわ、家に帰るのは八時・九時になるのはざら、色々な数しれない悪さをやってきた。子供でなければ、田舎でなければ、私の罪はかなり思い罰になるものであったと思う。

飲酒に関しては、中学校を卒業するまでのことを言うと、正月か祭りに日本酒を二・三合飲んだ程度で、それ以上飲まないし、飲も

うとはしなかった。只、いつも感じるものがあつた。それは、祭りとかでは私だけが飲むのでは無い。他の祭りに出る子供達も一緒にお神酒として頂くわけで、普通は湯呑みに半分ほどを飲み干して出て行く。酒に弱い子はそれでもフラフラとおぼつかなくなる。私はと言うと祭りだからといつものように調子に乗って三杯四杯、四杯は万が悪いと五杯飲む。顔を赤らめ目をパチパチしている子供の中、顔色を変えず平然と飲む私は自分でなんともカッコいい小学生だと自信満々でいた。そう、いつも感じていたことは私は誰よりも酒に強いと言うこと、他の子供達とは違うということだ。

### 体験発表中



高校は地元を離れ広島にいく。全寮制で寮に入っていたが一年生の終わり頃に学校・親にわがままを言って寮を出て兄と同居させてもらった。高校に入ってボクシングをしていたのだが、がっかりした体系だった私は減量していた。それがボクシングをやめたにもかかわらず続いていた。もはや、減量とかではなく、完全な拒食症になり六十五キロあつた体重は一時三十五キロにまで落ちた。元の体に治りはしたが、不眠症とうとうんでもなく厄介な土産が残ってしまった。こいつをどうにかするのに思いついたのが酒ということになる。悪いことをしている気持ちはなく、むしろ当り前の様に毎晩飲んだ。学校も欠席・遅刻。早退を繰り返すようになる。学費や車の免許を取ると言ってもらった金も酒に消えて行つた。結局、高校も担任や親の説得に耳を貸さずもう三年生の一月という時に退学を申し出た。それでいて、何かしなかったことがあつた訳ではない。

それから、また親に無理を言い大阪に出て一人暮らしを始める。給料の良い仕事が見つかった

た。地方を回る仕事だが、ハッキリ言うとうと香具師だ。月に一度まとめて一週間ほどの休みが貰えるので大阪に帰る。十九の若造が大金も時間も有り、なんでも出来る大都会だ。しかし、私がするのは朝も夜もわからなく、飲み続けること。一年ほどした頃、会社から次の出張先を伝える電話が来るが飲み過ぎて何もする気がなくなっているし、確かに具合が悪いの間違いのないのだからと「調子が悪いので、明日でもよいですか」と延期をしてもらおう。電話が掛かって来るのが嫌になり電話線を抜く。心配をした社長の奥さんが来たが居留守を使った。結局、その会社はそのまま辞めてしまった。これじゃいけないと次の仕事を探した私が探すのは給料のよい仕事だ。学歴も資格もなしで探して在るのは、やはり香具師まがいの仕事。



直感した。きっと、通帳にお金を入れてくれると。それから、数日後に親が来て一緒に島に帰った。私が一年半、大阪でしたことは酒を飲み、借金を作るだけのことだった。

これはごく最近、酒を止めてからの話だが、父親が私に「われとわしは、金でしか繋がってないんだよ」と言った。私は生まれて初めて体が凍りつくのを感じた。私は父親が大好きだ。幼い頃は傍らを離れることなどなかった。大きくなったって変わることなく、ずっと好きだ。一度だつて、父親を打ち出の小槌のように思ったことはないのにひどく動揺した。だが、父親はどんな思いでその言葉を口

にしたのだろうか。何故、そんな思いになったのか。幼い子供と離れて働かなければならない母親が言ったことがある。「置いて行くのがどれほど辛かった。」かと。両親に出来ることは貧しかった自分達と同じようなひもじい思いで子供達だけにはさせたくないという、その思いという、その思いだけで荒波の中を辛抱してきた。私もそれを知っていた。だからこそ両親を尊敬している。だが、私の今までやってきたことすべてが父親の目にはそうしか映らなかったのだろう。当然と言えは当然の話だ。父親の居堪れない思いは私には計り知ることが出来ない。お金を渡すことしか出来なかった父親とそれを当たり前のように使う子供に父親の思いを深く考えることがなかったし、甘えることしか考えつかなかった。今更と思うが、両親には長生きしてもらいたい私に出来ることをしていききたい。父親の今の願いは唯一「親より長生きしろ」というものだけなのだが。

話を戻すと、親と一緒に仕事をしようになるが酒をやめるはずはない。馬鹿飲みこそはしないがこつそりと父親との晩酌以外にワンカップを二・三本買っておき飲んで、漁の最中に買いだめしている酒を開けて飲んでいたりまた隠れて飲むために、この頃から一気に飲み干す癖がついたようだ。決つて少ない量ではないが、それですんでいたのだから良かったのかもしれない。だが、魚場も漁獲も少なく後を継ぐことは父親も勧めることはなく、心配ではあるが陸に上がつての仕事望んでいた。

広島に帰り、また兄の家に厄介になる。この頃には安くてきつい焼酎にかわつていた。色々な仕事を転々としたが、二十二歳の時、幼友達からの誘いで一緒に仕事を始める。建設業だが、私はまったくしたことがないので教えてもらいながら真面目にやつていた。友人は一生懸命に仕事をもらつてきた。だが、私は真面目に働きはするが、あるのは酒の事。その友人にも言われたことがある。「酒を飲むことしか考えてないのか」と。或る日、急な用で夜中に友人宅に行くことになったが、夜中といえは完全に酔つて寝ている。バイクに乗れば飲酒運転だ。見事に事故をし、体は吹き飛び転がつて行つ

た。ヘルメットはしてなかったが、足の擦り傷と手首の骨折ですんだ。痛さで酔いは覚めた。警察や救急車が来ても厄介なので痛さを我慢し友人の家まで行った。さて、こうなると体が資本の仕事が出来るはずはない。しかし、片腕の不自由など酒を飲むのになんの不自由にもならない。一日五合の焼酎だが、三日と言わない間に一升へと替わる。一升から二升到替わるのに一週間程だっただろう。私の場合は二升が限界のようで、一日にそれ以上は飲めなかった。二升の焼酎を一日かけて飲むわけだが薄めることはない。そして、一気に飲む。最初の空腹時にこれをすると、胃がぎゅつとしめつけられるようになる。ウイスキーなどならまだ結構で、これが私にはこの上ない快感であった。だが、一つだけ面倒な事があった。買い出しだ!!。毎日二升を買わなければならぬ。近くに馴染みの酒屋があるが、二升を毎日買うのはさすがに恥ずかしい。そういうわけで店を替え、日をずらして一本づつ二升を買うのだが、これもすぐにやめて一番近い店だけになる。羞恥心なんてものは瞬く間になくなり

酒への執着心だけとなる。手首の骨折というとなかなか治らない。当然だ!!。焼酎で骨がくっつくなんて聞いたことがない。それでも、一ヶ月くらいでギブスもとれたが、仕事に行ける状態ではなかった。ギブスがとれて一ヶ月くらい経った頃、不思議に思うかも知れないが自分で自分の体の異変に気がなかつた。確かに食欲がなくなつたというより、食べ物が胃に入らないという感じになつたことは気が付いていた。大袈裟ではなく握り寿司一貫で満腹になるのだ。普通の人ならおかしいと思うはずだが、私は思うことがなかつた。兄と一緒に住んでいたが、タバコも酒も飲まない兄は私を毛嫌いしていた。だが、本当は勝手気ままにたい放題の私に無関心を装うことしか出来なかつたのかもしれない。顔も合わさないから、口をきくこともなかつた。ある日、兄が一言「変など」と私に言った。

これで、少し正気に戻り、私は鏡を覗いた。顔色がおかしい?。目つきはいやに恐ろしく、目の色は赤茶色だ。正確にはそう見えるのかというと、霞んでハッキリ見えないのだ。腹はまるで地獄絵図に出てくる餓鬼のようになってる。「ヤバイ、ヤバイ」と心の中で繰り返した。今までなつたことがない自分、知らない自分、わかるのは、大量飲酒をしたことだけ。頭の中が二文字の言葉だけとなる。「死ぬ、死ぬ、死ぬ...」本気で恐ろしかった。どうしよう、どうしよう...と。だが、そこですること



支えてくれる妻と

も只一つ、焼酎を飲むことだった。次の日、近くの駅から大病院に行きのバスに乗った。昨日まで気付かなかつたが、随分前からこんな姿だつたのだらう。目も霞み、ふらつき歩く異様な形相で毎日酒を買い求める男。知らないのは自分だけだった。病院に着き、血液検査、診察のあと医師が言ったことは今でもよく覚えている「三日、もう三日遅ければ、目を覚ますことはなかつただろう」そう私に言った。点滴はして貰ったが「うちでは入院出来ないから、他所の病院を紹介するので三日後にまた来てくれ」。それまで、絶対に酒を飲まないように...と。あの言葉に少しの脅しがあつたかなかつたかはわかりはしないが、それより何より今から酒を飲まなければ、まだ死なない。助かるのだと思いが強かつた。親にはまた迷惑や心配をさせることになる。

酒が原因の最初の入院だ。病室に上がるエレベーターは、鍵を使わないと動かせない。大病院の医師が「ショック療法だと思つて気にするな」と言つていた言葉の意味がわからなかつたが、精神病院で治せということだつたのかとわかつた。確かに病院にはかわりはない。只、売店に自由に行けないのが少し不便なだけで、シヨックなど感じなかつた。それより、ポロポロの体に情けなくて涙が出ていた。腹は異様に膨れており、腹水というのを初めて知つた。二ヶ月ほどの入院中は悔し涙を流

し、後悔をしていたように思うが、酒を止めようと思うことはまったくなかった。死ぬほど苦しいめに会ったのに……今になって振り返ると、その時は自分が若かったからなのか、自分が思っていたより治りが早かったからなのか、それともアルコール依存症とはそういうものなのか、とにかく私の飲酒は続いて行った。

その後、十五年間の飲酒生活の末に呉みどり断酒会に入会する。過去を振り返ってみると、当然これも私のして来たことの一部であり、微々たる体験談に過ぎないが、これだけでもよくわかる。いかに酒が本人を狂わせ、周りの人までも狂わせるかが。酒が悪い訳ではないが、酒で心が歪んでしまったことは事実だ。療養中の人の中にも居ると思うけど、社会復帰したい、早く退院したいと思う気持は、私もそうだったからよくわかる。しかし、今一度考えてみよう。それは、自分だけの思いだと言うことで家族の思いはどうなのかというのを。自分のことより、迷惑や心配を掛けた人の気持ちを優先してみよう。そんな心のゆとりが持てているのなら、止めるとい

う意志があるのなら、退院しても断酒をして行けると私は信じている。

体は治っても歪んだ心は治ることはない。心の奥で一杯の酒を求めている。偉そうに言っているが私だって断酒会に入り、例会に出てそんなことが解りだしたばかり。理解したつもりでも、それはほんのひとかけら……。療養中の反省は始まりにすぎないし、そこから終わることのない感謝・報恩の日々が続く。退院する時の気持ち、退院してからの行動が肝心なのだ。何年も止めている人が再飲酒する。自分が飲んではいけない人間だということを忘れ、歪んだ心が出てくるからだと思う。拘らない、諦めない、素直な心を持つてやめたい、やめ続けたい。一人では、何も出来ない私には断酒仲間が必要なのだ。今後も私は例会に出続けるつもりでいます。

これで私の体験発表を終わります。ご静聴、ありがとうございます。した。



### 第41回山陰断酒学校

残暑厳しい八月二十六、二十七日、松江市玉湯公民館に於て、第四十一回山陰断酒学校が開校された。当会からは初参加者一名を含む十三名が、数台の車に分乗して参加。参加した皆さんは、より強く、より豊かな断酒人を目指しての入学であったが、初入校の福永さんは普段とは異なる会場の雰囲気や迫力ある会員さん達の体験発表に圧倒され、驚くとともに感激した様子。緊張感と充実感の中で三日間の研修が終ると皆、笑顔。今回で知り会った友達との再会を約束しつつ、帰路に着いた。



### 第41回 県連研修会(江田島)

台風一過の九月二十三、二十五日、今年も二百四十名余りの広島県内の会員・家族が集い、広島県連研修会が江田島青少年交流の家で開催された。当会も三名の初参加者を含む二十三名の会員・家族が参加。研修会初日は、大阪新生



会病院の和氣隆三先生と呉みどりヶ丘病院院長長尾澄雄先生。最終日は広島共立病院の西原一樹先生の講話が在り、研修会は他の大会・研修会とは異なった和気あいあいとした雰囲気会場内に漂っており、休憩時間にはアチコチで笑いの輪ができ、あつという間に過ぎ



た三日間という感が残る何時もの楽しい研修会だった。

**NPPO 法人広島断酒ふたば会  
創立四十五周年記念大会**

秋風が漂い始めた十月九日、呉みどり断酒会の先輩格にあたる、NPPO 法人広島断酒ふたば会創立四十五周年記念大会が広島国際会議場・フェニックスホールに於て開催された。当会からも会員・家族六十名が参加。

大会は、新年二月五日に開催の呉みどり断酒会創立四十五周年記念大会が迫っているせいか、プログラムが終わる度に話し合っている会員・家族の姿。「みどりの会」の創立記念大会は、ここまで盛大に出



来ないけど、出来るかぎりのお持て成しの心を持って参加して下さいな友人の方達を迎えないといけないネエ。とにかく、本番に向けて頑張ろうやア」と云う言葉が印象に残った大会でした。



**呉みどりヶ丘病院  
創立41周年記念  
第483回特別院内断酒例会**

初秋を感じる十月十六日、呉みどりヶ丘病院に於て、三百六十三名の会員・家族、療養生の方達が参加し、創立四十一周年記念特院が盛大に開催された。



体験発表者は療養生一名、正会員二名、家族会員一名で当会からは、北舩武康さんが発表した。その後院長先生の記念講演で盛り上がり、何時までも長尾澄雄院長先生の益々のご活躍を祈念し、当院の御発展をお祈りして終了した。

**第48回全国(静岡)大会**

静岡市のグランシップに於て、10月23日(日)、第48回全国(静岡)大会が、三千名余りの参加者を集めて、盛大に開催された。

当会では恒例になっている、団体での観光旅行を兼ねての参加は都合により残念ながら実現できなかったが、当会からは9名が、それぞれの交通手段で参加した。

出発前から、「富士山が見えりやいいがの」などと、どうやらみんな富士山を楽しみにしていたみたい。残念!!。生憎の曇天模様で、期待してた富士の姿は拝めなかった。しかし、大会の方は盛り上がり、「更なる公益活動を目指して」のテーマどおり、公益法としての第一回目の大会。広島大会から続いているプラカード入場のセレモニーの後、来年の第49回全国(兵庫)大会のアピールが行われた。

大会が終わって帰路につきながら、それでもひよっとして...と後を振り向くが富士の姿は...でも私達は、富士より大きな思い出と感動をもらった大会であった。

### 「飲酒運転追放」街頭キャンペーン

11月10日断酒宣言の日

秋風が肌寒く感じられる11月10日、今年も十五名の会員、家族が呉駅、そごう店前に集合、手に手にのぼり旗、手さげ袋を持って、飲酒運転追放キャンペーンのチラシ（ティッシュ）配布を実施した。さすがに呉の表玄関、それにそ



「お疲れさまでした」 呉駅前にて

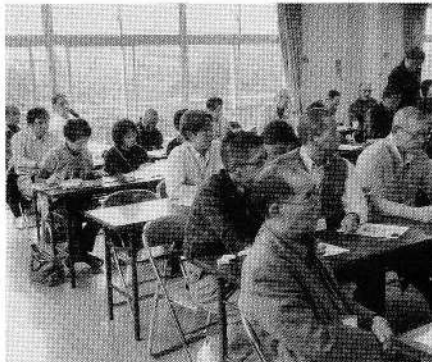
ごう店の開店時間と合致し、用意した三千枚のチラシ紙は約一時間半で配布終了となった。「飲酒運転追放キャンペーンを行っています。どうぞ、これを使って下さい。」「ありがとう。御苦労様です。」心温まる言葉のやり

とりに、何やら満足感、喜びのよななものを感じた。

県内各所で一勢に実施したキャンペーン。時々携帯が鳴り、「どう？ 呉の方は。うちはもうすぐ終わるヨ」などと情報交換などしながらの有意義な「断酒宣言の日」であった。

### 第16回ふくやま一泊研修会

黄金色のイチョウの落葉が、秋雨に一層鮮やかに映えている福山の「みろくの里」で、今年も二百数十名の参加者と、講師として、三光病院の市川先生を招いて一泊研修会が開催され、当会からも十名が参加した。



参加者の顔ぶれも年々全国区になり、体験発表も、ユーモアを交じえた市川先生の講演も大盛況で、和気あいあいの和やかな雰囲気会場内に漂っていた。休み時間には、裏庭でギンナンを拾う家族の姿も見られ、有意義な一泊研修であった。

### 第21回中国ブロック断酒セミナー

秋の深まりを感じさせる11月12、13日、第21回中国ブロック断酒セミナーが伯耆富士で有名な大山の麓、ホテル大山に於て、百八十三名の会員・家族が参加して開催された。当会からも七名が参加。

亦、セミナーは、会員の研修①『会員の減少と対策』。研修②『リーダーの育成について』。研修③『断酒会のあり方と今後』のテーマ。家族は『家族の回復を目指して』をメインテーマに研修①『酒害者を家族はどう支える』。研修②『断酒会が無くなったら』。研修③『新入会員の家族を、どうサポートする』。会員・家族は、研修テーマに基づき、各地域断酒会の現状や啓発活動の取り組みを報



告し、忌憚のない活発な意見交換をして、後述の「活動宣言」が満場一致で承認された。各断酒会の方達は、これから一年間、活動宣言に基づく断酒活動を行う事を誓って、各各の帰路についた。

### 【活動宣言】

私達は、公益社団法人全日本断酒連盟・地域断酒会に所属することとで今日まで断酒の継続ができています。

厳罰化されても減らない飲酒交通事故、生き辛さや喪失感からのうつ・自殺・女性酒害者の増加、定年後の多量飲酒や酒害の若年化等、飲酒による問題は、増加の一途をたどるなか、反対に地域・全国での会員減少は、留まるところを知らない。

これらの問題を真摯に受け止めこの『第21回中国ブロック断酒セミナー』に於いて以下の取組を活動宣言とする。

1、原点を見つめ例会出席と体験談の重要性と例会のあり方を考えよう。

2、「人に尽くして己を救う」を合い言葉に、会員、家族共にいまだ酒害に苦しむ人たちに断酒の喜びを伝えよう。

3、医療・行政・断酒会の連携、ネットワーク作りを強化して一人でも多くの酒害者を救済しよう。

平成23年11月13日

鳥取県大山「ホテル大山」

寄付者御芳名

(八月度)

呉 大下忠志様 一〇、〇〇〇円

〃 藤田数夫様 五、〇〇〇円

感謝箱 一、一四九円

(九月度)

感謝箱 二、四〇〇円

(十月度)

呉 金子武久様 五、〇〇〇円

〃 安岡利勝様 七、〇〇〇円

〃 大段一弘様 五、〇〇〇円

感謝箱 一、三二六円

新入会員紹介

●呉市阿賀北一―一五―三四

第二大谷荘 土屋 章

●呉市阿賀北一―一七―一六

第五大谷荘 吉川 幸江

○1月28〜29日

第35回愛媛県ワンナイト・セミナー

(愛媛県生涯学習センター)

○2月5日

呉みどり断酒会創立45周年記念大会

(呉市民会館)

○4月8日

第47回中国断酒ブロック(山口)大会

(山口市市民会館)

☆一年 安岡 利勝 9月22日

☆〃 金子 武久 10月1日

☆〃 前田 敏美 10月9日

☆〃 伊藤 康浩 10月30日

☆四年 村本 隆 8月1日

行事予定

公益社団法人 全日本断酒連盟

呉みどり断酒会

創立45周年記念大会

大会テーマ「初心」

日時 平成24年2月5日(日) 10時〜15時30分

場所 呉市民会館

平成23年8~10月度例会動員員数

行事名	回	正会員	家族会員	賛助会員	社会会員	院内会員	サ-セ-ト	合計
土曜例会	13	472	168	70	253	954	189	2,106
水曜例会	13	456	195		10			661
家族の集い	3		26					26
ブロック例会	3	34	18					52
懇談	3	6						6
特別院内例会	2	49	19					68
新会員を囲んで	3	30	9					39
全断連東京セミナー	1	1						1
第41回山陰断酒学校	1	11	2					13
第41回広島断酒連合会研修会	1	19	4					23
第45回広島断酒連合会創立記念大会	1	44	16					60
呉みどりが丘病院創立40周年・特例	1	33	12					45
第48回全国(静岡)大会	1	6	9					9
県連理事会	2	4						4
呉みどり断酒会役員会	3	21						21
合計		1,186	476	70	263	954	189	3,134